

あみだくじに人情を



新しい機器などを購入すると使い方のマニュアルが付いてきます。マニュアルとは取扱説明書とか使用の手引書のことですね。実は医療の世界にもマニュアルが存在します。それは医療

機器の取扱説明書ではなく、病気の診断や治療法のガイドライン、すなわち病気の取り扱い説明書です。ガイドラインの作成はしばらく前から医療界で流行になっており、『咳嗽・喀痰の診療ガイドライン』とか『脳卒中治療ガイドライン』など、数多くが作成されています。いずれもある症状や病態に対して YES か NO で枝分かれていく、二者択一の分かりやすい流れになっています。しかし血が通い感情も働く人間を対象とする場合、マニュアルというのはどうもしっくりきませんね。自分にとって不慣れな専門領域の診療では、参考になりありがたく思う反面、白黒を明確に区別する単純明快で楽観主義的な世界観に、自分の経験を持って余し戸惑いを感じる昨今なのです。

例えばコロナ感染症はマニュアル診療の中でも最たるもので、最初から最後までフローチャートでやり方が決まっています。発熱即検査となり、たった一回だけの PCR の結果で、陰性者は「コロナではない」と断言されて野放しになる一方、陽性者は法の下に拘束されます。療養期間は「発症日をゼロ日としてその翌日から10日間」、療養終了はこの10日間に「解熱して72時間が経過」の条件が加わります。病状は年齢、基礎疾患の有無などを考慮するとはいうものの、実質は酸素飽和度 95%以上か以下かで見分けられます。そして治療薬の選択も「この状態の患者はこの薬」など、すべて一対一対応でやり方が決まっています。以上の流れの中で、医師が経験的見解を挟む余地はありません。言うなれば、患者が自分で情報を入力すれば、医師が不在でも画面上で指示を受けることが出来るような体系なのです。

数値を絶対視しがちな現代医療ですが、本来生身のからだは同じ病気であっても考え方は個人毎に異なってしまうべきです。その点でマニュアルの楽観主義は、全人的な医療が求められるこの時代の流れに逆らっているとも言えます。そもそもマニュアルは科学的根拠のみに基づいていますが、医療が医学と同一でない限り、「根拠」が科学的なものだけだと考える視座は、あまりにも浅はかと言わざるを得ません。社会学的根拠もありましょうし、人間的根拠や歴史学的根拠だって挙げられます。科学は個別の経験や人間的な心情は全く排除します。そのため例えば極めて高いストレス環境下にある患者と、非常に充実した生活を送って

いる患者とが、患者背景として区別されないというヘンテコな状況が、マニュアルでは許容されるのです。確かにマニュアル診療は、誰がどこで受けても同じ医療が受けられるという標準医療としての価値があります。しかし上記のように生活スタイルなど、統計学的に処理できない人間の背景を捨象したデータでは、患者を全人的に把握することは困難なように思えます。

以前栄養学を学んでいたときに、マニュアルを参考にして家族に食事を作ったことがありました。「小さじ一杯」などおなじみの表現を忠実に再現した科学実験のような完成品は、あまりにもプロ並みの味で、本当に私が作ったのかと皆で驚いたものです。しかし確かにおいしかったけれど、後々考えてみれば味気ないというか、つまらなかったというのが本音でした。例えばデパチカで売っている総菜とか、ファミレスで食べるラーメンみたいに、波風立たない無難さだけで、味に主義主張が感じられないのです。おいしいだけで作り手の心が感じられない、だからつまらない。料理は作り手の心情が大切です。作り手は食す側の好みや健康を考えた料理を提供し、食す側は作り手の想いを受け止める。これが料理を介した無言の対話であり、人情のやり取りなのだと思います。かつてドッグフードしか食べたことのない飼い犬に、余りもののみそ汁をかけた冷や飯を与えたら、二度とドッグフードを食べなくなったことがありました。犬の本能的な思いが、行動に直結したのかもしれない。

経験という人間の象徴が霞み始めています。昭和の時代までは経験こそが価値でした。あらゆる作業は人間の能力の範囲内にあり、経験を積まなければまともな仕事が出来なかったのです。したがって人間社会は、年功序列にならざるを得なかったのだと思います。ところが、仕事が手作業からパソコン業務に転回し始めると、経験は水面下で発想などに取って替われ、経験からにじみ出る人間味も、いつしか人々から薄らいでいったようです。しかし対人関係においては、やはり人間的な経験が基盤になるように思えます。駐車場の精算が、ある日人対応から自動精算機に替わって、その融通の利かなさややるせなさを感じたことは誰しもあるでしょう。食事が作り手と食す側との対話であるのと同様に、医療も患者と医療者との濃密な対話であり、治す治されるの二項対立構造というよりは、危うい生を営む同志として、共に歩む関係にありたいと願います。専門家のデータに基づくマニュアルは大切です。しかしそのあみだくじのような二進法の中に、経験に基づく人情をどのように加味するかが、昨今の私の課題なのです。